



Title	『逢坂越えぬ権中納言』覚書
Author(s)	後藤, 康文
Citation	北海道大學文學部紀要, 45(2), 31-59
Issue Date	1997-01-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33675
Type	departmental bulletin paper
File Information	45(2)_PR31-59.pdf



『逢坂越えぬ権中納言』覚書

後 藤 康 文

本稿は、『堤中納言物語』所収の一篇『逢坂越えぬ権中納言』をとりあげて従来の注釈書の不備・誤り等をいくつか指摘し、いささかの卑見を述べることを目的とするものである。

『堤中納言物語』の本文は、高松宮家蔵本（池田利夫解題、復刻日本古典文学館）、宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本（池田利夫解題、笠間書院）、広島大学蔵浅野家旧蔵本（塚原鉄雄解題、武蔵野書院）、穂久邇文庫蔵久邇宮旧蔵本（久曾神昇解題、汲古書院）、吉田幸一氏蔵平瀬家旧蔵本（吉田幸一解題、古典文庫）、桃園文庫蔵島原本（寺本直彦解題、東海大学出版会）、桃園文庫蔵榊原本（同上）、三手文庫蔵今井似閑自筆本（塚原鉄雄・神尾暢子校注、新典社）の八本を参照し、適当と思われるかたちで引用した（頁・行数の表示については、とりあえず最後にあげた新典社本のもを掲げたが、特別な意味はない）。

また、今回参照あるいは引用した『堤中納言物語』の注釈書と稿中における略称は以下のとおり。

・久松潜一『校註堤中納言物語』（昭三、明治書院）……………『校註』

『逢坂越えぬ権中納言』 覚書

- ・清水泰『増訂堤中納言物語評釈』（昭九、立命館出版部）……………『評釈』
 - ・吉沢義則監修『堤中納言物語新講』（昭二七、藤谷崇文館）……………『新講』
 - ・上田年夫『堤中納言物語新釈』（昭二九、白楊社）……………上田『新釈』
 - ・佐伯梅友・藤森朋夫『堤中納言物語新釈』（昭三一、明治書院）……………佐伯・藤森『新釈』
 - ・寺本直彦『日本古典文学大系・堤中納言物語』（昭三二、岩波書店）……………『大系』
 - ・山岸徳平『堤中納言物語全註解』（昭三七、有精堂）……………『全註解』
 - ・松尾聡『堤中納言物語全釈』（昭四六、笠間書院）……………『全釈』
 - ・稻賀敬二『日本古典文学全集・堤中納言物語』（昭四七、小学館）……………『全集』
 - ・土岐武治『堤中納言物語の注釈的研究』（昭五一、風間書房）……………『注釈的研究』
 - ・三谷栄一『鑑賞日本古典文学・堤中納言物語』（昭五一、角川書店）……………『鑑賞』
 - ・池田利夫『旺文社文庫・現代語訳対照堤中納言物語』（昭五四、旺文社）……………『対照』
 - ・三角洋一『講談社学術文庫・堤中納言物語全訳注』（昭五六、講談社）……………『全訳注』
 - ・塚原鉄雄『新潮日本古典集成・堤中納言物語』（昭五八、新潮社）……………『集成』
 - ・稻賀敬二『完訳日本の古典・堤中納言物語』（昭六二、小学館）……………『完訳』
 - ・大槻修『新日本古典文学大系・堤中納言物語』（平四、岩波書店）……………『新大系』
- なお、和歌の引用は『新編国歌大観』に、各種散文文献の引用は各々所掲の書物に基づいたが、いずれも漢字・仮名づかい等の表記を適宜改めてある。

五月待ちつけたる花橘の香も、昔の人恋しう、秋の夕べにもおとらぬ風にうちにほひたるは、をかしうもあはれにも思ひ知らるるを、山時鳥も里なれて語らふに、三日月の影ほのかなるは、折から忍びがたくて

(P91L15)

この物語の起筆部分。あたかもそれは、およそ二十年ほどのちに編み出されることになる、あの『狭衣』の華麗な冒頭を予告しているかのようにみえる。したがって諸注が、「五月待ちつけたる花橘の香も、昔の人」の典拠として、人口に膾炙した名歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(『古今集』夏—139・よみ人しらず)を、「山時鳥も里なれて」の典拠として、これまた名歌「あしひきの山時鳥里なれてたそかれ時に名のりすらしも」(『拾遺集』雑春—1079・大中臣輔親)を、こぞつて指摘するのはむしろあたりまえの話であって、ことはあまりに自明だった。しかし、引歌がそれだけというのでは、いかにも間が抜けていよう。すなわち、両者に挟まれていかにも思わせぶりに綴られている箇所にもまた、しかるべき典拠ありとみるのが当然なのだ。事実、かつてはこの部分に格別引歌を想定しない立場が一般的であったのに対し、『注釈的研究』が「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり」(『古今集』恋—546・よみ人しらず)を「引歌とみるのが妥当」と断定したほか、『鑑賞』『全訳注』『集成』『完訳』『新大系』といった近來の注釈書は、同歌あるいは「吹き来れば身にもしみける秋風を色なきも

のと思ひけるかな』（『古今六帖』一—423）を、引歌ないし参考歌として掲げるようになってきている。だが、これではいかにも隔靴搔痒の感を免れない。なぜなら、右の二首よりもはるかに適切な引歌候補が別に現存しているからである。それは、和泉式部の次の一首だ。

夜、寝も寝ぬに、障子をいそぎ開けてながむるに

・恋しさも秋の夕べにおとらぬは霞たなびく春のあけぼの

（『和泉式部続集』—188）

歌意じたいは物語の場面設定に適合するものではないけれども、この歌の措辞が、先の間部にある「恋しう、秋の夕べにもおとらぬ風に」の典拠となっていることはほとんど疑う余地がない。とするならば、いな、この引歌を認定することによつてはじめて、『逢坂越えぬ権中納言』冒頭の凝った文章表現のしくみ、『狭衣』ばりの畳みかける引用の様相が十全に立ち現われてくるのである。ちなみに、三つの引歌に便宜上番号を付しそれぞれが踏まえられた箇所
に傍線を施したかたちで冒頭本文を再掲すれば、このようになる。

①五月待ちつけたる花橘の香も、昔の人②恋しう、秋の夕べにもおとらぬ風にうちにほひたるは、をかしうもあはれにも思ひ知らるるを、③山時鳥も里なれて語らふに、三日月の影ほのかなるは、折から忍びがたくて

ところで、『鑑賞』は「三日月の影ほのかなる」という文も、今日ではわからないが、引き歌が存在したのに相違

ないと思われる」と述べているが、たとえば、

・暮れはてむ空をばしほし三日月の影ほのかなる名ごりをぞ思ふ

（「千五百番歌合」—2739・源通光）

・さらぬだに影ほのかなる三日月の心細くも木の間漏るかな

（「為忠家後度百首」—285・藤原為盛）

といった後代の和歌が残されていることを思えば、逆にこれらの歌の方が『逢坂越えぬ権中納言』の表現を受容した可能性も否定はできないものの、四つめの引歌、というのもじゅうぶんにありえたのではないかと思う。

二

中納言、さこそ心に入らぬけしきなりしかど、その日になりて、えもいはぬ根ども引き具して、参り給へり。小宰相の局にまづおはして、「心をさなくとり寄せ給ひしが心ぐるしさに、若々しき心地すれど、安積の沼を尋ねて侍り。さりとて、負け給はじ」とあるぞ、頼もしき。いつの間に思ひ寄りけることにか、①いひすくすへくもあらす。みぎの少将、おはしたんなり。「いづこや。いたう暮れぬほどぞよからむ。中納言はまだ参らせ給はぬにや」と、まだきにいどましげなるを、少将の君、「あなをこがまし。御前こそ、御声のみ高くておそかめれ。彼は、しのめより入りゐて、ととのへさせ給ふめり」などいふほどにぞ、かたちよりはじめて、同じ人とも見えず、はづかしげにて、「②なとよ。この翁、ないたういどみ給ひそ。身もくるし」とて、歩み出で給へる、御年のほど

ぞ、二十に一、二ばかりあまり給ふらむ。

(P97L4~P100L1)

ここは、本文整定上の問題が二点。まずは、傍線部①の「いひすくすへくもあらず」について。従来の諸注はこの箇所を、本文のままに「いひすくすべくもあらず」と読んで、たとえば、「いくら言葉を尽くしてほめても、言ひすくしようもない」(上田『新釈』)、「言い過ぎる事は、まあ、ありませぬ。言ひすくす」は褒め過ぎる事(『全註解』)、「(いくらお褒めしても)言い過ぎすはずもない」(『対照』)、「いくらほめてもほめ過ぎるということはない」(『新大系』)などと解釈しつづけてきたわけであるが、これはまったく信じがたい誤りというほかはない。複合動詞「いひすくす」はむしろ失言のニュアンスを帯びたことばであり、実際には名詞「いひすくし」のかたちで用いられることが多い、といった指摘をわざわざするまでもなく、この場合の「いひすくす」が「いひつくす」からの転訛であることは、あまりにも明白だ。「いひすくす」ならぬ「いひつくすべくもあらず」が、「口ではとても表現できない、筆舌に尽くしがたい」という意味を表す当時のありふれたいまわしであったことは、次に列挙する用例からも容易に思い起こされるはずである。

・またの日、旅に久しくもありぬべきさまのものどもあまたある。身にはいひつくすべくもあらず、かなしうあはれなり。
(『蜻蛉日記』中巻／新日本古典文学大系・P151)

・九月一日に出でおはします。道のほどのことども、いひつくすべくもあらず。

(『うつほ物語』吹上下巻／古典文庫・P536)

・女房ども呼びつかひ、局にものをいひやり、文をとりつがせなどしてあるさま、いひつくすべくもあらず。

(三卷本『枕草子』「身をかへて」の段／新日本古典文学大系・P270)

・御いのり、方々に隙なくのしる。祭祓修法など、いひつくすべくもあらず。

(『源氏物語』夕顔巻／日本古典文学全集—(1)・P255)

・秋ごろ、和泉に下るに、淀といふよりして、道のほどのをかしうあはれなること、いひつくすべうもあらず。

(『更級日記』／新日本古典文学大系・P426)

・うつくしう、らうたげなるさまなど、いひつくすべくもあらず。声、気配、ほのかなるありさま、かけまくもしこき御命にもかへつばかりに、いみじと御覧じしませ給ふ。

(『夜の寝覚』巻三／日本古典文学大系・P204)

・すべて、いひつくすべくもあらぬ人なりけり。ただ、あたりもにほひ満ち給ひ、光りかかやくなどは、かかるをいふなりけりとぞ見えし。

(同巻四／同・P279)

・少しうち赤みて、この御文に紛らはし給へる用意、気色、まみなど、いひつくすべうもあらずめでたう見え給ふに

(『狭衣物語』巻一／日本古典全書—上・P213)

語り手はここで、中納言の持参した菖蒲の根が、ことばでは「いひつくす」ことができないほどにすばらしい、と賞賛しているのである。なお、今回参観した諸本における「す」の字母はすべて「春」だが、実際の誤写は、「徒」と「須」の間で起こったと考えるのが妥当なところだろう。

ついで、傍線部②の「なとよ」について。ここもそのまま「なとよ」に作られ、たとえば「とよ」は強めて添えた助詞で、意味は「など」（どうして）にある（佐伯・藤森『新釈』）、「とよ」は感動助詞であろうから「など」と同義とみてよからう。「など」は用例から考えると「何故」の意らしい。「何故まあそんなにきおい立たれるのか」の意であろう（『全釈』）、「どうして、なぜの意がある副詞「など」に、引用を示す格助詞の「と」と問投助詞「よ」による連語「とよ」が添ったもの。どうしたと（あなたは思うのです）よ、の意（『対照』などといった説明が行われてきたようであるけれども、これもきわめて疑わしい。その理由はいたって簡単で、「なにと」が転じた疑問の副詞「など」に連語「とよ」が直結することは、そもその原理からいってもありえないと思われるし、実際の用例も見いだせないのではないかと考えられるからだ（もしもそのような例があるのであれば、確かに示してほしいものである）。私見によれば、ここはそうではなく、「なとてか」「なとかは」「なとか」あたりからの本文転訛を想定してしかるべき箇所ではないかと思う。いずれも意味上は下に「さは侍らむ」が省略された形の反語であり、また、可能性としてはどの本文からの転訛もじゅうぶんに起こりえたと判断されるが、本稿では、「天」↓「止・と」、かつ「可」↓「与」の誤写過程を考えて、

・「いで、ただ、なすげそ」といふを、さすがに「なとてか」と思ひ顔に、えさらぬ、にくささへそひたり。

（三巻本『枕草子』「心もとなきもの」の段／新日本古典文学大系・P202）

・「さて今宵もや帰してんとする。いとあさまじう、からうこそあべけれ」とのたまへば、「なとてか。あなたに帰り侍りなば、たばかり侍りなん」と聞ゆ。（『源氏物語』空蟬巻／日本古典文学全集（1）・P196）

・「などさは。参ると聞きて逃げ給へるか」と問ひ給へば、「などてか。かくのみこそ。さべき法文など習ひ聞えさせ給ふとて」と聞ゆれば

(『夜の寝覚』 卷四／日本古典文学大系・P315)

などの例に同じく、ひとまず「などてか」を選択しておきたい。要するに中納言は、敵方ふたりの会話、中でも少将の君の誇張されたことばじり「彼は、しののめより入りゐて、ととのへさせ給ふめり」を聞きとがめて、「どうしてそんなことがありましょう」と否定していると考えられるわけである。こうしてみると、つづく「この翁、ないたういどみ給ひそ。身もくるし」とのつながりもよく、従来、「何ですつて」(『評釈』)、「何とおつしやいます」(『新講』)、「どうしてそんなにおつしやるんです」(上田『新釈』)、「何でそうおつしやいます」(佐伯・藤森『新釈』)、「どうしたというのですよ」(『大系』)、「何と言う事でありますかねえ。(もう、そんなに挑ましげで——競争的な態度で、御有りなのは。)」(『全註解』)、「何故まあ(そんなにきおい立たれるのですか。)」(『全釈』)、「いつたいどうしたというんです」(『全集』)、「なんということでしょう(そんなに競争的な態度でいらつしやるのは)」(『鑑賞』)、「なんだというのですよ」(『対照』)、「いつたい何ごとですか」(『全訳注』)、「どうしたんだい」(『集成』)、「一体なに事をそんなに」(『新大系』)等々と、揺れに揺れていた現代語訳にもようやく決着がつくことになる。

三

またの日、あやめも引きすぎぬれど、名ごりにや、菖蒲の紙あまた引きかさねて、

昨日こそ引きわびにしかあやめ草深きこひちにおり立ちしまに

と聞え給へれど、例のかひなさをおぼしなげくほどに、はかなく五月もすぎぬ。

(P108L8～P109L7)

根合の翌日、中納言が思いを寄せる「宮」に贈った一首。その解釈のありかたをここでは問題にしてみたい。まずは諸注を任意に繙くに、この歌はこれまで、およそ次のように訳されてきているようだ。

○昨日(五月五日は、如何にも菖蒲の根を引く日であつたから、)その根を引くために(私は、)情けなく侘しい思いをしてしまいました。(それは)深い泥の中に、はいりこんで行つた時に、(どうしても、なか／＼菖蒲の根をうまく引けずに、)引き侘びたからでした。(表)

(昨日ばかりではなく、何時もそうなのですけれども)昨日と言う昨日こそは、(御身にも逢えず、)如何にも頼りなく、物足らぬ侘しい思いで(私は一日)暮してしまいました。御身を思ふ深い恋路に(私が)はまりこんで居る時でありますので。(裏)

○昨日は菖蒲を引きわづらつて、わびしく過ごしました、深い泥・恋路にはいつて難渋しました間に (『全註解』)

○昨日こそは菖蒲草を引きぬけないで難渋してしまいました。深い泥の中におり立ちましたあいだに。(あやめ草を引く日である昨日こそはとりわけてつらくさびしい思いをしました。あなたを思つて深い恋路に入りこみましたので。)

(『全釈』)

○昨日という昨日は菖蒲草を引き抜くのに苦勞して、辛く淋しい思いをしました。深い泥——あなたへの恋路——に
おり立ちました間に。 (『対照』)

○昨日は菖蒲の根を引きわびて、わびしく過ごしました。深い泥地ならぬ恋路に降り立ったままで。それで今日、
苦しい胸のうちをお伝えするのです。 (『全訳注』)

○昨日は菖蒲の根を引きわびて、わびしく過ごしました。深い泥地——恋路に降り立ちましたまま。 (『新大系』)

すなわち、中納言の歌は実質的に第三句で終止しており、第四・五句は以上を補足する関係にあると把握するわけ
だが、そこでどうしても気になるのは、諸注が同歌の「昨日こそくしか」にまったく逆接の意味あいを認めようとし
ていない点なのである。というのも、そもそもこの形式を踏む歌は、よく知られた次の二首、

・昨日こそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風の吹く

(『古今集』秋上—172・よみ人しらず／『新撰和歌』一—6／『古今六帖』一—127／『和漢朗詠集』下—5
71等)

・昨日こそ年は暮れしか春霞春日の山にはや立ちにけり

(『拾遺集』一—3・赤人／『万葉集』十一—1843／『古今六帖』一—14／『和漢朗詠集』上—77等)

をはじめとして、

『逢坂越えぬ権中納言』 覚書

・昨日こそ君はありしか思はぬに浜松のうへに雲とたなびく

(『万葉集』三—444・大伴三中／『古今六帖』四—2435)

・昨日こそ船出はせしかいさなとりひぢきの灘を今日見つるかも

(『万葉集』十七—3893)

・昨日こそ寝待ちもせしか春の夜の今宵の月をいかが見るらむ

(『うつほ物語』春日詣—120)

といった前代の和歌、また、これは本歌取りの手法からして当然の結果ともいえるが、

・昨日こそ秋は暮れしかいつのまに岩間の水のうす凍るらむ

(『堀河百首』—881／『千載集』冬—387・藤原公実)

・昨日こそ波はかけしか楫枕雲しく峰も袖は濡れけり

(『千五百番歌合』—2893・藤原家隆／『壬二集』—597)

・昨日こそ霞立ちしか時鳥またうちはぶく去年のふる声

(『拾遺愚草』—1522)

・昨日こそ時雨はせしか藤袴けさ来て見ればなほぞ露けき

(『為忠家初度百首』—334・源仲正)

・昨日こそ花は散りしかみ吉野の青根が峰に夏も来にけり

(『文保百首』—1218・藤原俊光)

・昨日こそ焼くとは見しか春日野にいつしか今日は若菜摘みつづ

(『新千載集』—34・よみ人しらず)

・昨日こそ夏は暮れしか朝戸出での衣手寒し秋の初風

(『新統古今集』秋上—347・源実朝／『金槐集』—180)

・昨日こそ氷解けしか水無瀬川春を深めて立つ霞かな

〔草庵集〕—51—

等々後代の詠作と、そのいずれをとってみても、「昨日くしたばかりだ（と思つていた）のに、（今日は早くも）く」の意で、逆接的に下にかかつてゆく語法になっているからだ。「昨日こそくしか」とはそうした一種の定型表現なのである。とするならば、当面の中納言の歌だけがそこからはずれたきわめて例外的な作だとは、少々考えにくいのではないだろうか（かりにそうであるならば、それなりの説明があつてしかるべきだ）。どうやらこの一首、根本的に解釈を見直してみる必要があるらしい。

では、どのように解決すればよいのか。——その方途は、可能性としていちおうふたつあるように思う。ひとつは、この歌の構造を事実上、「昨日こそ深きこひぢにおり立ちしまにあやめ草（ヲ）引きわびにしか（…………）」あるいは「昨日こそあやめ草（ヲ）深きこひぢにおり立ちしまに引きわびにしか（…………）」と捉える考え方。つまり、「昨日、深い泥地の中に足を踏み入れた間に、菖蒲を引き抜くの苦労したばかりですのに……………」とだけ述べて、下に「今日は早くも、別の泥地——あなたへのままならぬ恋路に難儀していることです」くらいの省略があるとする理解なのだけれども、よしんばそのような〈省略〉の手法を容認するとしても、これでは歌末尾の表現「まに」がなんとなくお荷物となつてうまく処理しきれないうらみが残るように感じられる。

そこで、もうひとつの考え方が生じてくることになる。それは、結句の本文に欠陥ありと想定する〈誤写〉説である。別ないい方をするならば、現在みる中納言の歌本文は明らかに奇妙であり、本来は先の類型から逸脱しないですむ解釈がすつきりと施せるようなかたちだったのではないかと推測してみるわけだ。たとえば、原形「おり立ちて

けり」が、「天介利」↓「之万耳」の誤写過程を経て、現在の「おり立ちしまに」に変化した、というように。かりにこの本文に依拠してみると、一首の大意は「昨日、菖蒲を引き抜くの悪戦苦闘したばかりなのに、今日は早くも、泥地ならぬあなたへの深い恋路に足を踏み入れてしまい、苦悩しています」ほどに解せるだろう。

現段階では、確信をもてる解決案を示すには至らないが、個人的には〈誤写〉説の方にこだわってなお考えてみたいと思っている。重ねていうが、これは類型とは無関係な特殊な歌なのだ、とあくまで主張するのであれば、それに対応する〈特殊〉な説明を怠ってはならないはずだ。

四

土さへ割れて照る日にも、袖干すよなくおぼしくづをる。十日余日の月くまなきに、宮にいと忍びておはしたり。宰相の君に消息し給へれば、「はづかしげなる御ありさまに、いかで聞えさせむ」といへど、「さりとても、もののほどしらぬやうにや」とて、妻戸押し開け、対面したり。うちにほひ給へるに、よそながら移る心地ぞする。なまめかしう心深げに聞えつづけ給ふこともは、奥のえびすも思ひしりぬべし。「例の、かひなくとも、かくときゝつばかりの御ことのをはだに」と責め給へば、「いさや」とうち嘆きて入るに、やをらつづきて入りぬ。

(P109L7〜P111L6)

六月のさやかな月の夜、恋情やみがたい中納言は宮邸を密かに訪れて宰相の君に苦衷を訴える。ここでは、傍線部

「かくときゝつばかり」を組上にのせたい。これは確実に損傷を蒙っている本文だからだ。そこでまずは、いくつかの注釈書の見解に耳を傾けてみよう。

○通釈のように解するのには、「つ」の下に「と」が無ければ無理である。

(佐伯・藤森『新釈』)

○はつきりしない言い方である。こうと自分(姫宮)が聞いたというぐらゐの姫宮の御詞をなりとせめて承りたいの意か。この意に解するなら本文は「かくと聞きつとばかり」又は「かく聞き給ひつとばかり」とでもありたいようである。

(『全釈』)

○上のように解するには「かくと聞き給ひつとばかり」とありたいところ。(中略)舌足らずな表現。

(『対照』)

○「聞きつ」のあとに「と」がほしいところ。権中納言はこれまで一言の返辞(事)ももつたことがない。

(『全訳注』)

「つばかり」の語法に想到すれば、ここを「融合表現」と規定して、「想定する姫宮の会話表現「かくと聞きつ」が、引用形式にならないで、直接に引用する中納言の会話表現の「ばかり」を下接する構成の表現である」(『集成』)などと説明するのはやはり牽強付会であつて、右にあげた諸注が指摘するように、この場合、「つ」と「ばかり」の間に格助詞「と」が要求されるのは必至だ。が、話はそれで終わりではなく、同時に、「かくと聞きつ」の「と」は不用であることも見すごしてはなるまい。すなわち問題の本文は、正しくは「かく聞きつとばかり」とあるべきなのである。そして、その転訛過程はおそらく、「かくきゝつとばかり」↓「かくきゝつ□はかり」↓「かくときゝつばかり」で、

引用の格助詞「と」がいったん脱落を起こしたあと、誤った位置に復活してしまったのではないかと推察されるのである。以上の傍証を数例、最後に掲げておきましょう。

・「今日の試業は、青海波に事みな尽きぬな。いかが見給ひつる」と聞え給へば、あいなう、御いらへ聞えにくくて、「ことに侍りつ」とばかり聞え給ふ。
(『源氏物語』紅葉賀巻／日本古典文学全集—(1)・P384)

・蔵人の君、例の人にいみじきことばを尽くして、「今は限りと思ひはつる命の、さすがにかなしきを。『あはれと思ふ』とばかりだに、ひとことのたまはせば、それにかへとどめられて、しばしなからへやせむ」などあるを
(同竹河巻／同—(5)・P83)

・「この、奉る文を見給ふものならば、給はずとも、ただ『見つ』とばかりはのたまへ」とぞいひやりける。されば、「見つ」とぞいひやりける。
(『平中物語』第二段／日本古典文学全集・P467)

・つゆまどろまれず、おぼし明かされて、「見き」とばかりの気色も、ほのめかさせ給はまほしけれど
(『夜の寝覚』巻三／日本古典文学大系・P209)

・「いとかう、世に知らぬもの思ふ人もありけり」とばかりだに、知らせ給へかし。

(『狭衣物語』巻一／日本古典文学大系・P56)

・「常よりは、御覧じつ」とばかりの御返りごとを見給ふにも、今はじめたることにはあらねど、いとかく憂きものにおぼしめされにけるわが心の恨めしさも、「今はいかがせむ」とおぼししづめられず(同巻三／同・P227)

五

臥し給へるところにさし寄りて、「時どきは、端つ方にも涼ませ給へかし。あまり①むもれいたるも」とて、「例の、わりなきことこそ。えもいひしらぬ御けしき、常よりもいとをしうこそ見奉り侍れ。『ただひとこと聞えしらせまほしくてなむ、野にも山にも』と、かこたせ給ふこそわりなく侍る」と聞ゆれば、「いかなるにか、心地の例ならずおぼゆる」とのたまふ。「いかが」と聞ゆれば、「②れいはみやにをしふる」とて、うごき給ふべうもあらねば、「かくなむ聞えむ」とて立ちぬるを、声をしるべにて、尋ねおはしたり。(P111L6~P113L3)

中納言の哀訴を伝えに來た宰相の君と、その主人姫宮とのやりとりである。ひとつめの問題点として、まず傍線部①をとりあげておきたい。そのわけは、この表現について、「埋れ給ひたるも」とありたいところ(『対照』／『新大系』)、「敬語がないから、一般論として言ったもの」(『全集』)、さらには「「……………居たるも……………」とあるから、宰相の君が奥に埋れて居たけれども、今、外に出たら涼しくてよかったのである」(『全註解』)との珍説まで含めて、少なくとも三とおりの解釈が提示されているからで、それはひとえに、尊敬語「給ふ」の〈欠落〉をどのように理解するかという次元での見解の相違であつたといつてよい。しかし、である。たとえば、以下に掲げるいくつかの類例を見ていただきたい。

・重しとても、いとかうあまり埋れたらむは、心づきなくわるびたりと、中将はまいて心いられしけり。

(『源氏物語』末摘花卷／日本古典文学全集—(1)・P349)

・あまたの年ごろ、この道を行きかふたび重なるを思ふに、そこはかとなくものあはれなるかな。少し起き上がりて、この山の色も見給へ。いと埋れたりや。

(同東屋卷／同—(6)・P88～9)

・上は、御几帳のうちになほはた隠れて、さだかにもおはせぬを、「なほ外に出でさせ給へ。あやしく埋れて」と聞え給へば、ゐざり出で給へるに

(『夜の寝覚』卷五／日本古典文学大系・P366)

・よき女のかしづかれ給ひたるは、かくこそおはすべけれど見ゆるものから、あまり埋れ給へる気色などは、かくはなばなともてなされ給へる御ありさまにはたがひて

(『狭衣物語』卷一／日本古典全書—上・P242)

これらの〈類例〉をよくよく注意して見ていると、傍線部①の孕んでいる真の問題は、実は「給ふ」の有無にあるのではなく、むしろ複合動詞「埋れゐる」の方にあるのではないか、ということに気がつくはずである。早い話が、「埋る」の用例はこのように造作なく拾えても、「埋れゐる」の用例は見出だしがたい、ということなのだ。考えてみれば、その人物が内気で辛気臭く引きこもりがちであることを表現するには「埋る」を用いるだけで必要十分だったわけだ。とすれば、「給ふ」が脱落したのではとか、一般論だとか、姫宮ではなく宰相の君自身のことを述べているのだとか、もはやそうしたことはまったく争点とならない。ここでの課題はただひとつ、「むもれいたるも」の原形探求なのである。そうなると、誰の脳裏にも思い浮かぶことばは、形容詞「埋れいたし」ではないだろうか。「給」↓「ゐ」の誤写で「埋れ給(ひ・う)たるも」とする別のアイデアにも未練は残るが、本稿では、ひとまずこの「埋れいたし」

の方を正解とみて採っておきたい。

- ・ 立ちながらと、たびたび消息ありければ、いでやとはおぼしわづらひながら、いとあまり埋れいたきを、物越しばかりの対面はと、人知れず待ち聞え給ひけり。 (『源氏物語』賢木巻／日本古典文学全集―(2)・P76〜7)
- ・ このたびは、いといったうなよびたる薄様に、いとうつくしげに書き給へり。若き人のめでざらむも、いとあまり埋れいたからむ。

(同明石巻／同・P239)

- ・ かうなむ気近きほどにて見奉りつるとばかりは、かの御耳に聞え知らせざらむも、あまり埋れいたき心地して

(『狭衣物語』巻二／日本古典全書―上・P289)

『全釈』は、「刈谷一冊本のように「むもれいたくも」なら、判りやすい」と述べているが、当該文脈においては「埋れいたくも」よりも、「あしう侍りなむ」等の省略を考えた「埋れいたきも」の方が、より適切なかたちといえよう。誤写過程としては、「支」↓「留」がじゅうぶんに想定可能である。

さて、ふたつめの問題点は、傍線部②の「れいはみやにをしふる」。まず、参観諸本に加えて『校本』をも繙くに、三手文庫本等ごく一部の本で「れいはみにやをしふる」とあるほかは、現存するほとんどの伝本の本文はこのかたちであることが知られる。そして、三手文庫本に拠った『注釈的研究』が、本文を「例はみにやをしふる」に作り、「みにやのみは、身で、自称の代名詞で、自分、わたくし等の意」と説明しているのを除けば、同じく三手文庫本を底本として極力その本文に忠実な読解を心がけているはずの『集成』も含めて、諸注ここを「例は宮に教ふる」と読み、

そのうえで、

○いつもはこの私にどう教へてゐるか、みだりに男に返事などしてはいけぬと言つてゐるのではないか。〔校註〕

○でも、いつも、私に軽々しく殿方に御返事など申してはいけないといつて教へるではありませんか。〔新講〕

○いつもは私に（軽々しく男に返事をするものではないと）教えるのに。〔全釈〕

○いつもは私に「軽率に男へ返事などするものではありません」と教えているのに。〔新大系〕

のごとくに解する立場と、

○（こんなふうには、男の人から消息のあつた時は、どうすればよいかについて）いつもはお前が私（宮）に教えてくれることですよ。（それなのに今夜に限つて、いかがなどと私に聞いたりする。これはいつたはどうしたことなの。）

私にはわからないわ。それに気分も悪い）。〔鑑賞〕

○いつもなら、おまえが私に受け答えを教えてくれるのに。〔全訳注〕

のごとくに解する立場とおおまかにみて対立している、というのが現状らしい。だが、どちらの解釈にしたがうにしても不思議でならないのは、これら諸注が自称としての「宮」になんら疑いをいだいていない点なのだ。結論からいえば、いくら「宮」様であつても自称はあくまで「まろ」のはずであり、会話の中で自分のことを「宮」と呼ぶこ

とはありえない。ゆえに、「宮」を「私」と訳するのは、まったくの誤りなのである。いくつかの注釈書が参考として掲げる『夜の寝覚』巻三の「例は教へ給ふにこそ」はこの点で似て非なる例としか評せないし、また、『評釈』が、この箇所を強いて「地の文である」として、「いつも男といふものは浮気物故軽々しく返事などするものではない、と教へてゐるではないかといふ様子で」などと、依拠した本文におよそ忠実とはいいがたい通釈を施している理由もそこにあったのかもしれない。

少なくとも、「みや」Ⅱ「宮」で姫宮の自称と解することは許されない。それでもなお「例は宮に教ふる」の本文に執着するのであれば、その場合の「宮」とは、中納言の姉妹にあたる「中宮」か、作品の表面には登場しない姫宮の女親Ⅱ「母宮」か、「両者のうちのどちらかを指すものと考えるほかはあるまいが、物語展開上の必然性を問題にするまでもなく、謙譲語が欠如したかたちの本文「宮に教ふる」では、いずれの道もはじめから閉ざされていると判断せざるをえないだろう。どうやら従来通説の「みや」Ⅱ「宮」と捉える解釈は、このあたりで完全に放棄されねばならないようだ。

ならば、どうするか。――遺憾ながら現時点でこれといった妙案はない。ただ、最低限これだけはいえるはずだ。すなわち、傍線部②本文中の「や」はまぎれもなく係助詞であつて、末尾の「ふる」（ハ行下二段動詞の連体形）と呼応関係にあるということである。推定される原形の骨格を示せば、「例はくやくふる」となるわけだが、そこから先がどうもよくわからない。『大系』は、その補注において、

○底本ほか諸本「みやに」。「をしふる」と連体形で止めてある点から見て尚・三・神本「みにや」（身にや）による

べきか。

と述べており、また実際に、三手文庫本を底本とする『注釈的研究』は、すでに紹介したようにその線で理解して「諸本の多くは「みやに」とあるが、底本文は原本通りであらう」と主張しているのだけでも、この見方にもにわかには賛同できないわけがある。それは、一人称代名詞としての「身」は、はるか後代、能・狂言の時代にまで下つてようやく現われてくるということで、十一世紀中葉の散文において、「身」「私」の用法は常識的には考えにくいところだろう。あくまで人称代名詞にこだわるのであれば、「こ（己）」↓「み（三）」の誤写とみて、「例はここにや教ふる」と解く腹案もあるにはあるが、それもいかがか。傍線部②本文の難解さを指摘して、今はこの程度にとどめておくほかはない。

六

さて最後に、少々趣きを変えて、この物語中に見てとれる「ことば遊び」的表現を順にいくつか指摘しておくことにしよう。

琴、笛など取り散らして、調べまうけて待たせ給ふなりけり。ほどなき月も雲隠れぬるを、星の光に遊ばせ給ふ。
 この方につきなき殿上人などは、ねぶたげにうちあくびつつ、すさまじげなるぞわりなき。

(P93L5) (P94L3)

これは冒頭近く、五月三日の夜の内裏管弦の記述であるが、傍線部分の意味についてはこの夜の演奏の評価と絡めるかたちで、

○音楽に興味がなくても、こんなにすばらしい演奏がわからないとは、むちやくちやな話だ。間接的に演奏のすばらしさを誉めている。

(『全集』)

○間接的に管弦の遊びのすばらしさを表現し、半面こうした音楽の才のない人は、色好みでもないことを暗示する。

(『鑑賞』)

と把握する立場と、

『逢坂越えぬ権中納言』覚書

○権中納言は帝のおぼえがめでたく、管弦にすぐれた理想の人物と見えるが、その今の憂愁の思いが伝染してしまつたからか、宮中での内々のお遊びも興のないものとなつた。 (『全訳注』)

○三日月の光に遮られていた幽かな星の光が見えるのだから、五月闇と呼ばれる雲の垂れこめた夜景である。嗅覚印象を刺激する状況だが、音楽効果を發揮するには、適切ではない。権中納言の、情熱のない義理だけの演奏で、「つきなき殿上人」をも感動させるほどでなかつた平凡な遊樂を想察させる。 (『集成』)

と理解する立場とが対立している。けれども、この一文がわざわざ添えられた最大の理由が、少なくともそうした次元で論じられるべき性質のものでなかつたことは明らかだ。すなわちここは、「ほどなき月も雲隠れ」てしまった、その叙述を承けて「この方につきなき殿上人」が登場してくるしくみになっているわけであつて、「つきなし」に「月無し」を響かせて洒落ている点こそが重要なのである。この掛詞は、

・逢ふことの今ははつかになりぬれば夜深からではつきなかりけり (『古今集』俳諧歌—1048・平中興)

・明けぬればつきなくなりぬ女郎花人しれずこそ摘まむとは思へ

(『古今六帖』六—3677・凡河内躬恒／『躬恒集』—475)

・ふけし夜の星の光のあやなさにつきなしとてぞ立ち帰りぬる (『浅茅が露』—9)

等々ありふれたもの。極論するならば、この「洒落」を付加するためだけに傍線部本文は書かれたとさえいつてよか

ろう。

2

「明後日、根合し侍るを、いつかたにか寄らむとおぼしめす」と聞ゆれば、「あやめも知らぬ身なれども、引き取り給はむ方にこそは」とのたまへば、「あやめも知らせ給はざなれば、右には不用にこそは。さらば、こなたに」とて、小宰相の君、押し取り聞えさせつれば、御心も寄るにや、「かう仰せらるる折も侍りけるは」とて、にくからずうち笑ひて出で給ひぬるを

(P 94 L 8 ~ P 96 L 1)

五月五日に中宮の御前で催される根合のために、小宰相の君が中納言を強引にわが方人にしてしまふ、という場面だが、ここで傍線を施したごとく、動詞「押し取る」が選択されたのはなぜであろうか。このことばについて、たとえば「強引に、無理やりに取りこむこと。あやめの機転で、すばやく中納言の気持を引きこんだのである」(『対照』)とするのはしごくもつともな見解といえるが、言語遊戯の観点からすれば、また別の見方もできるのではあるまいか。要するに、この「押し取り」は、中納言の発言「引き取り給はむ方にこそは」に導かれて選び出されたものではなかったか、と。菖蒲を「引く」に掛けた「引き取る」との対比で、今度は「押し取る」と承けているわけである。結果的にそのような解釈が可能になっているのだ、というのではなく、そこには作者の愉快的遊び心が必ずや作用していたものと思われる。

中納言、さこそ心に入らぬ気色なりしかど、その日になりて、えもいはぬ根ども引き具して参り給へり。

(P97L4~7)

根合当日、中納言の参上である。が、傍線部「引き具して」を説明して、たとえば「菖蒲の「根」の縁語。たずさえて」(『新大系』)と述べただけではほとんど意味がなく、「引く」は菖蒲の「根」の縁語。しゃれた言いまわし」(『全訳注』)というのでもまだもの足らない。ここは、「えもいはぬ」菖蒲の「根ども」を擬人化して、よりすぐりの精鋭部隊を中納言が意気揚々と引き従えてやつて来たとする、作者のユーモアを感じ取らねばならないところであろう。このことは、

・中將、人々引き具して帰参りて、かぐや姫をえ戦ひ止めずなりぬること、細々と奏す。

(『竹取物語』／新潮日本古典集成・P83)

・三条いとめでたく造り立てて、「六月に渡りなむ。ここにて、かくいみじき目を見るは、こここのあしきかと心見む」とて、御むすめども引き具して、急ぎ給ふ。

(『落窪物語』卷三／柿本奨『落窪物語注釈』・P469)

・おほよそ人だに、今日の物見には、大將殿をこそは、あやしき山賤さへ見奉らんとすなれ。遠き国々より妻子を

引き具しつとも参うで来なるを

(『源氏物語』 葵卷／日本古典文学全集(2)・P15)

・その夜、内裏にも女三宮ぞ具し奉らせ給ひて、入り給ひけるを、御覧するにつけても、「あまた引き具し奉らせ給はましものを」とおぼしめすに、『亡きが多くも』とは、げにこれにや」と、言忌もしあへさせ給はず。

(『狭衣物語』 卷二／日本古典全書—上・P350)

・年はいと若くて、大式にもなりければ、やむごとなき妻どもあまた引き具して、思ふさまにて下れど

(同卷四／同—下・P281)

などといった例に照らしても明らかではあるまいか。

4

「むげにかくてやみなむも、名ごりつれづれなるべきを、琵琶の音こそ恋しきほどになりたれ」と、中納言、弁をそのかし給へば、「そのこととなきいとまなさに、みな忘れにて待るものを」といへど、のがるべうもあらずのたまへば、盤渉調にかい調べて、はやりかにかき鳴らしたるを、中納言、堪へずをかしうやおぼさるらむ、和琴取り寄せて、弾きあはせ給へり。この世のこととも聞えず。

(P105L5～P106L7)

根合、そして歌合も終わった。その「名ごり」の「つれづれ」を充たすべく、やがて中納言の主導で管弦の遊びが

『逢坂越えぬ権中納言』覚書

はじめ。この部分にみえる二箇所の「こと」を諸注はそのまま平板に解釈して済ませているようであるが、少なくともふたつめの「こと」には、楽器の「琴」の意が掛けられていると考えるべきではあるまいか。すなわち、「(中納言の弹奏する和琴の音色は)この世の琴(の音色)とも思われない」というわけである(ちなみに、塚原鉄雄・神尾暢子両氏による新典社本の注記は、「現世の琴の音とも思えない」としている)。また、中納言のことはを受けた弁の応答にも、「(御所望の琵琶に限らず)どの琴(＝弦楽器)を(練習する)」ということもないほどの忙しさに」といった機知を読み取る方がおもしろい。なお、『浜松中納言物語』巻二で、帰朝した中納言が上京後はじめて参内し、帝の御前で箏の琴を奏でる次の場面、

・御前に召しありて参り給へるに、年ごろ隔てて御覧ずるは、あさまじうこの世のものならず。……「遊びなどもさまじう覚えて、ことにものの音なども聞かでなんすごしつるに」とて、御遊びはじめ。中納言は、この世のことどもめづらしうおぼされて、見し世の春に似たりしほどなど、ことにつけつついみじうおぼさるれば、心澄ましてかきたて給へる箏の琴の音、おもしろうあはれなることかぎりなし。(日本古典文学大系・P250)

なども、同様に読むことが許される例のひとつに数えてよいと思うのだが、いかがであろうか。

*

『逢坂越えぬ権中納言』を読み解くうえで、また、論じるに際してその確定が重要な鍵を握る、例の、「少将」か「中

将」かという大問題には、残念ながら触れえなかった。以上に述べた私見の妥当性を含めて、積み残されたこの作品の注釈上の懸案について、今後もお検討をつづけたい。